

「社会安全・警察学」の発刊に寄せて

藤 岡 一 郎

京都産業大学 学長

このたび京都産業大学社会安全・警察学研究所の雑誌「社会安全・警察学」が発刊の運びとなり、ご同慶の至りで、関係者各位のご尽力に敬意と感謝を申し上げます。

申すまでもなく、従来、犯罪・非行に係わる治安問題解決の担い手は、警察および司法機関に委ねられてきました。それを国民も当然のこととし、警察および司法機関関係者も国家機関として責任を果たす自負と誇りをもって携わってきました。その基本的枠組みは、現在においても変わっているわけではありません。しかし犯罪抑止の視点からは、犯罪・非行の事後処理としての機能について疑問と批判が生じた1960年代後半から、米国において、またその後ヨーロッパで、犯罪・非行に至るまでの事前予防の研究が焦点になってきました。先進諸国のなかでもっとも治安の良かった我が国においても、1990年代後半になって治安状況は急激な悪化を辿り、2002年には統計上最悪の犯罪認知件数となりました。また、量的な面のみならず、特に子どもが被害者となり、あるいは加害者が少年である悲惨な事件は、その内容や質の面で国民の瞠目するところとなりました。

1990年代以降、犯罪・非行の事前予防の研究を通じてあるいは実践を通じて、我が国の犯罪・非行の量的・質的変容に対してさまざまな試みがなされてきました。なかでもコミュニティの在り方に収斂する、ステイクホルダーの参加と協働を必須とする実効的な取り組みがなされてきました。そして現在は、実効的取り組みそのものの「科学的」研究とともに、実践主体としての取り組みの積み重ねが喫緊の課題となっています。そのために学際的かつ文理融合な知見にもとづく実践の場が社会、特に実践に携わるステイクホルダーから求められていました。この研究所は、そのような歴史的存在として設立したわけです。

初代所長の渥美東洋先生は現在の我が国において、この研究所のまさに望みうる最高の適任者でした。この分野における英米の動向に精通され、我が国の警察および司法の在り方を先導してこられ、初代所長として、この研究所の基盤となる研究とその実践の方向を形成してくれました。しかし、その途上、去る本年1月30日逝去されました。これまでも多くのご指導・ご示唆を頂いたとはいえ、先生の広く深い知見の集積の一端を学んだに過ぎない者にとって、もはや直接に学び得ることのできない悔しさと悲しみが尽きることはありませんが、この雑誌の創刊号に初代所長の逝去を記し、深甚の哀悼の気持ちを捧げます。渥美先生ありがとうございました。

今後は、2代目所長田村正博教授のもと、社会安全・警察学研究所の使命を確固たるものとし、これまでの足跡を踏まえ、その使命を果たしてくれるものと確信しています。創刊号発刊を機に社会安全・警察学研究所がますます充実し発展することを期待しています。